11.22 岐阜新聞

木曽川導水路 意見相次ぐ

機構が住民説明会 環境レポート巡り

徳山ダム（揖斐郡揖斐川町）の水を揖斐川から木曽・長良川に流す木曽川水系連絡導水路事業で、水資源機構は20日夜、岐阜市橋本町のハートフルスクエアーGで、「環境レポート」の作成に向けた住民対象の説明会を開いた。参加者約30人からは、リニア中央新幹線の工事で見られた地盤沈下への懸念や、恒久構造物「管理施設工」への説明を求める意見が相次いだ。

岐阜市から参加したという女性は、導水路の掘削に伴う地下水位の低下や地盤沈下への心配に言及。「起こってしまってからでは遅いことをリニアで実感した。（調査に）慎重を期して」と要望した。ボーリングマシンで地中を掘り進めるシールド型TBM工法への変更で、機材の搬出入や運用後の点検に使われる立て坑「管理施設工」が設けられることについても触れ「大きな構造物が残るイメージを持っていなかった。その辺りの説明が地元にない」と対応を求めた。

水資源機構によると、8カ所に設けられる管理施設工はコンクリート製の円筒形で、大きさは未定だが長さ約10㍍のボーリングマシンが出し入れできる規模だという。事務局は「関係機関と相談しながら、丁寧に説明していきたい」と答えた。

このほか地下水位低下で懸念される小規模な遊水湿地の希少植物群の確認や放水口が近い岐阜市の長良川鵜飼への影響の調査、揖斐川から持ち出す水の年間総量の明示などの意見が出た。

水資源機構は、環境影響評価（環境アセスメント）に準じた「環境レポート（案）」を2009年に作成しているが、事業の休止を経た環境や工法の変更を受け、16年ぶりに見直す。今回は調査の枠組みを決める「検討項目・手法編」の作成に向け、各務原、羽島の両市、揖斐郡揖斐川町を含む計4カ所で説明会を開いた。揖斐川・長良川総合管理所は、12月12日まで郵送やファクス、電子メールで意見を募集している。

傍聴した市民団体「長良川市民学習会」の武藤仁事務局長(75)＝岐阜市＝は取材に対し「工事、工法が変わっており、環境レポートの再スタートではなく、事業の再スタートとして説明しないと市民も分からない」と指摘した。（堀尚人）

住民らが参加した木曽川水系連絡導水路事業の環境レポート説明会＝20日、岐阜市橋本町、ハートフルスクエアーG

11.22 朝日新聞

木曽川水系の導水路 独自環境調査を再開

水資源機構が住民説明会

徳山ダム（揖斐川町）の水を長良川や木曽川に導水する木曽川水系連絡導水路事業で、事業主体の水資源機構が独自の環境影響調査を再開した。民主党政権下の「ダム検証」で事業が凍結されていたが、昨年8月に継続が決まった。20日までに県内4カ所で住民説明会が開かれ、トンネル工事に伴う地下水への影響などを懸念する声が出た。

導水路事業は環境影響評価法に基づく環境アセスメントの対象ではないが、水資源機構が独自に環境への影響を調査している。

水資源機構が開いた住民説明会＝岐阜市

20日夜、岐阜市で開かれた説明会には約30人が参加した。導水路は揖斐、長良、木曽の三つの川をほぼ地下トンネルで結ぶ。リニア中央新幹線の工事では地盤沈下や井戸の水位低下などが起きていることから「同じことが起きてからでは遅い」「湧水湿地の生態系が心配だ」などの声が出た。機構も「地盤沈下」を環境調査の評価項目に追加している。

導水の一部は、長良川鵜飼が行われる岐阜市の長良川の上流付近で流されるとみられる。水温や濁り、富栄養化について「影響は小さい」とされているが、住民から「ダムの水は水温が低く、有機物が多い。長良川の川底がヘドロ化しかねない」という指摘もあった。「ダムの水を入れて『清流長良川』と言えるのか」という意見もあった。

説明会への参加者は4カ所で計約60人だった。

水資源機構は環境調査の検討項目や手法について12月12日まで意見を募集している。

木曽川水系連絡導水路は愛知県と名古屋市の都市用水の供給、長良川や木曽川の環境改善などを目的に整備する。国と東海3県、名古屋市が事業費を負担する。36年度に完成予定。

（エリアリポーター・伊藤智章）